

坂道と距離という高齢者の生活の障壁について

北九州市立大学都市政策研究所
石 塚 優

はじめに—問題意識と仮説、調査の概要

1 問題意識と仮説

80年代後半に駅前を中心とする中心市街地の変貌が始まり、複合商業施設を都心部に再開発する地方都市の姿を変えてしまった。この要因は80年代後半に地価の安い国道やバイパス沿いに大規模店・量販店の出店が始まり、その後、90年代には規制緩和により大規模店・量販店が避けた地元商店街と商業調整が不要となってもこの傾向は続いた。人の移動は中心市街地から郊外大規模店・量販店へと変化した。これにより、中心市街地のみならず、住宅地近郊の商店街や小売店やスーパーの衰退・閉店は日用品、食料品の買い物の距離を延ばす結果となった。自家用車などの自動車利用を前提とせざるを得ない郊外の大規模店・量販店、大型複合店は斜面地に居住している高齢者にとり自動車利用が難しいことから、坂道、段差、路面の傾斜等に、距離というバリアも加えることとなった。

住宅地近郊のみならず、公共交通の利用が比較的便利な地方都市中心市街地はデパートやブランドショップを核とした複合商業施設周辺で商店街や大型スーパーも含めて人の回遊を誘う再開発も効果が薄く、生活の郊外化ともいえる流れは続いている。これを可能とした要因は地方の生活者の自動車保有台数の多さである。平成18年版国民生活白書（p274）によれば乗用車の世帯当たりの普及率は83.9%である。首都圏や関西圏、中部圏よりも地方都市の方が普及率は高く、世帯に1台から成人一人に1台に近い普及率になっていると思われる。

地方都市の中心市街地も含め商店街、小売店が衰退し、駅前のデパート後の店舗が空き家のまま長く放置される等の現象が多く、地方都市で現実となった。

今では、90年代の規制緩和による大規模店・量販店が地元商店街と商業調整が不要となった時点からの対応が遅れたといえる商店街の再生は進まず、多様な試みが一時的効果を示したとしても継続的・持続的で確実な方法はみあたらず、模索が続いている。首都圏や関西・中部圏の大都市で多い公共交通の利用は、地方都市には当てはまらない。免許取得可能年齢以上の成人の大部分が自動車運転を日常化し、自動車の運転の有無による生活の落差は地方では大きいのである。このような落差は、高齢者に不利になるであろうし、住宅近隣の商店街の衰退や小売店、スーパーの閉店は日用品、食料品の買い物を困難にする。さらに、斜面地に居住している高齢者は自動車利用が難しい上に坂道、段差、路面の傾斜等に距離という障壁も加わった。

斜面地の難点としては、坂道や階段、傾斜等は転倒などの危険性がある。消防や緊急自動車、救急等に不安がある。自家用車や自転車利用が難しい。坂道や階段、傾斜等は徒歩による移動（登り下り）に労力を要する等を指摘できる。一方、斜面地の利点としては、自動車が入ってこない（安全）。景観や自然環境が良い。空気が良い等が挙げられる。

この点を踏まえて、普通の居住地域と坂道や段差・階段の多い地域に居住する高齢者の日常生

活で欠くことのできない買物に関して比較する。

仮説は以下の通りである。坂道や段差が多い地域の高齢者は、①徒歩で行ける買物の距離が短い。②移動手段では自家用車よりも公共交通機関が多い。③買物の頻度が少ない。④買物が十分にできない。⑤近隣の人と相互の支援が活発。

以下では、坂道や段差の多い地域に住む人と普通の地域に住む人との買物の距離、回数、移動手段、頻度、社会関係について比較を行い、仮説を検討する。

謝辞

調査地点は斜面地を含むことから門司区清美校区と八幡東区枝光校区にお願いし、調査は留置法で実施しました。調査の概要は以下に既述しましたが、清美校区社会福祉協議会会長、副会長、福祉協力員の皆様に多大のご協力をいただきました。

枝光校区も清見校区同様に枝光市民センターを拠点として活動しておられるまちづくり協議会会長、副会長及び、まちづくり協議会を構成する地区社会福祉協議会、老人クラブ、自治連合会会長の5名の役員の皆様に多大な協力をいただきました。また、校区内の自治会・町内会の役員の皆様にも調査票の配布・回収など、多大な協力をいただきました。

おかげさまで、両地区ともに通常の調査では不可能な高い有効回収率を得ることができました。ご協力をいただいた皆様に、心から感謝いたします。ありがとうございました。

また、清美校区の調査報告書は開門地域研究vol.18（北九州市立大学都市政策研究所、下関市立大学地域共創センター2009）として既にまとめていますが、以下で比較検討した内容は一部を除き未掲載の部分です。枝光校区は開門地域研究vol.19（北九州市立大学都市政策研究所、下関市立大学地域共創センター2010）の付録として居住地域の環境別（斜面地とその他の地域）の単純集計を掲載したに止まっています。調査内容の大部分が未だに分析・検討されず残っています。23年度には調査地点の概要などとともに、全体を報告書としてまとめる予定です。ですから、以下では協力いただいた調査結果の一部を清美校区と比較する形で掲載しているにすぎません。ご協力いただいた皆様には集計・分析が滞り、誠に申し訳ありません。感謝致しますとともにお詫び申し上げます。

2 調査の概要

（1）清見校区の調査方法

① 調査方法

調査は校(地)区社協の福祉協力員の協力を得て、調査票を配布し、一定期間の記入期間を置いた後に回収する留置法により行った。

② 調査対象 地区の65歳以上の居住者全員。

③ 調査期間 2009年2月6日～20日

④ 回収率等

配布票数900票 回収票数870票 有効票数870票 有効回収率（96.7%）

(2) 枝光校区の調査方法

① 調査方法

調査は校(地)区まちづくり協議会会長、校区社協会長、校区自治連合会会長、老人クラブ会長等の協力を得て、町内会・自治会の役員会議で説明していただき、町内会・自治会の役員により該当する世帯に調査票を配布していただき、一定期間の記入期間を置いた後に回答後封筒に入れて封をした調査票を回収する留め置き法による。

② 調査対象者及び対象者数

斜面地に居住する65歳以上の1,165人（全ての人が斜面地に居住するとは限らない）。

③ 調査地点 北九州市八幡東区枝光校区

④ 調査期間 2010年2月6日から3月11日。

⑤ 回収率

調査票配布数：1,165 回収調査票数：1,057 回収率：90.7%

有効回収数：1,051 有効回収率：90.2%

I 斜面地居住者の区分方法

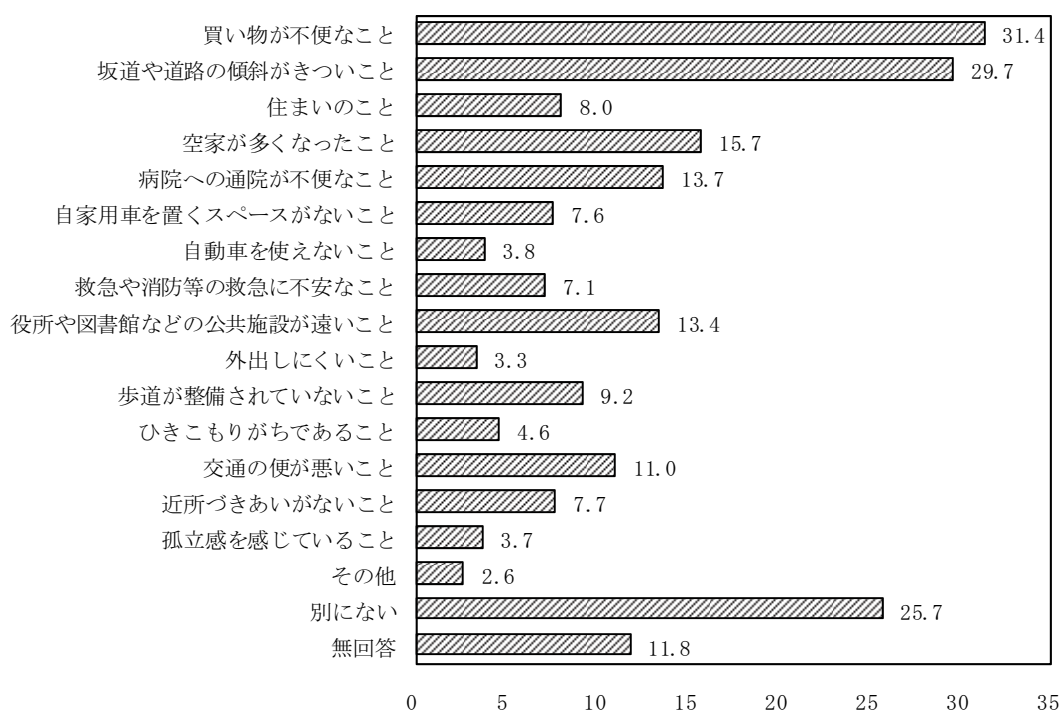
1 斜面地居住者の区分方法

(1) 清見校区

調査地区では回答した全ての人が斜面地に居住している訳ではないので、図1に示した生活全体で困っていることの中から、斜面地のためと推測できる回答を選び（「坂道や道路の傾斜がきつい」「自家用車を置くスペースがない」「救急や消防の等の不安がある」「外出しにくい」）、これらの回答者を斜面地に居住するとし、斜面地以外（以下：その他）と区分した。この区分方法による斜面地居住者数は、複数回答の中から重複を除いた324人、その他居住者数は546人である。

図1には日常生活で困っていることは「買い物が不便」「坂道や道路の傾斜がきつい」「別にない」という回答が多く30～25%。これらの他に「空き家が多くなった」「病院への通院が不便なこと」「役所や図書館など公共施設が遠いこと」等も1割以上存在する。買い物と通院を比較するとほとんどの人が買物は必要であり、通院が必要な人は限られていることの違いから、買物が不便との回答が最も多く、通院が不便は約1割である。

図1 生活全体で困ることや気になること、悩み（複数回答）



(2) 枝光校区

枝光校区の場合は質問の中で、坂道や段差、階段が多いことについて質問し、その回答を基に段差、階段が多いを「斜面地」、それ以外を「普通」として区別したが、回答しなかった「無回答」が約1割である。

表1 枝光校区の斜面地居住者数

全体		斜面地		普通		無回答	
人数	構成比	人数	構成比	人数	構成比	人数	構成比
1,051	100.0	681	64.8	254	24.2	116	11.0

II 対象者の基本属性

表2、3は基本属性の一覧表である。性別、年齢構成、世帯構成、居住年数、住むきっかけに関しては、斜面地も普通も大差がない。

介護保険の認定率では、全体では、約7割の人が介護の必要がないため申請しておらず、要支援1～要介護5までの計が11.2%である。これは市の認定率16～18%程度よりかなり低い水準である。

居住地別では斜面地の方が介護の必要がないため申請していない比率は高いのであるが、要支援1～要介護5は13.9%であり、普通の9.5%よりも認定率が高い。介護度は年齢との関連が強いが、図表3のとおり、特に斜面地の人の年齢が高い訳ではないし、認定率が高い75歳以上の年齢層が多い訳でもない。

枝光校区は清見校区に比べて、斜面地の性別では女性が少なく、年齢構成では65～69歳と85歳

以上が多く、世帯構成では夫婦のみ世帯が少ない。居住年は15年以上が同じ程度に多くを占めている。介護保険の認定率では、要支援1～2は「普通」の方が多いが、要介護を見ると斜面地が多い。

普通では清見校区に比べて性別では大差がなく、年齢構成では65～69歳が少なく、75～79歳、85歳以上が多い。世帯構成では「ひとり暮らし」（以下の図では「一人暮らし」）が多く、「夫婦のみ世帯」が少ない。その他の世帯は「親世代との同居世帯」「子世代との同居世帯」「親・子・孫の三世帯世帯」を加えるとほとんど同程度である。以下ではこれら三者に「その他」も加えてを加えて「同居世帯」としている。

表2 清見校区基本属性

		斜面地		普通	
		度数	構成比	度数	構成比
全体		324	37.2	546	62.8
性別	男性	118	36.4	188	34.4
	女性	206	63.6	354	64.8
	無回答	—	—	4	0.7
年齢区分	65～69歳	63	19.4	137	25.1
	70～74歳	78	24.1	114	20.9
	75～79歳	71	21.9	99	18.1
	80～84歳	50	15.4	100	18.3
	85歳以上	26	8.0	41	7.5
	その他	35	10.8	51	9.3
	無回答	1	0.3	4	0.7
世帯構成	一人暮らしの世帯	89	27.5	163	29.9
	夫婦だけの世帯	144	44.4	235	43.0
	その他の世帯	91	28.1	144	26.4
	無回答	—	—	4	0.7
居住年	1年未満	2	0.6	2	
	1年以上5年未満	10	3.1	17	3.1
	5年以上10年未満	13	4.0	31	5.7
	10年以上20年未満	45	13.9	75	13.7
	20年以上	250	77.2	413	75.6
	無回答	4	1.2	8	1.5
居住のきっかけ	生まれてから	42	13.0	78	14.3
	勤務地の関係	63	19.4	109	20.0
	環境のよさ	50	15.4	83	15.2
	便利のよさ	32	9.9	92	16.8
	その他	125	38.6	157	28.8
	無回答	12	3.7	27	4.9
介護保険の介護度	不要で申請していない	232	71.6	371	67.9
	認定結果自立（非該当）	10	3.1	14	2.6
	要支援1～2	24	7.4	29	5.3
	要介護1～3	19	5.9	18	3.3
	要介護4～5	2	0.6	5	0.9
	無回答	37	11.4	109	20.0

無回答は省略

表3 枝光校区基本属性

		斜面地		普通		無回答	
		人数	構成比	人数	構成比	人数	構成比
全体		681	64.8	254	24.2	116	11.0
性別	男性	294	43.2	100	39.4	40	34.5
	女性	382	56.1	153	60.2	71	61.2
	無回答	5	0.7	1	0.4	5	4.3
年齢区分	65～69歳	162	23.8	44	17.3	24	20.7
	70～74歳	155	22.8	58	22.8	20	17.2
	75～79歳	149	21.9	68	26.8	27	23.3
	80～84歳	108	15.9	47	18.5	26	22.4
	85歳以上	80	11.7	34	13.4	13	11.2
	その他	22	3.2	2	0.8	2	1.7
	無回答	5	0.7	1	0.4	4	3.4
世帯構成	ひとり暮らし	194	28.5	92	36.2	43	37.1
	夫婦のみ	248	59.0	80	31.5	32	27.6
	親世代との二世帯世帯	42	6.2	9	3.5	4	3.4
	子世代との二世帯世帯	116	17.0	47	18.5	21	18.1
	親・子・孫の三世帯世帯	50	7.3	10	3.9	6	5.2
	その他	19	2.8	9	3.5	5	4.3
	無回答	12	1.8	7	2.8	5	4.3
居住年	5～9年	10	17.5	11	37.9	4	28.6
	15年以上	47	82.5	18	62.1	10	71.4
居住のきっかけ	生まれてから	84	12.3	34	13.4	12	10.3
	勤務地の関係	159	23.3	56	22.0	18	15.5
	環境のよさ	32	4.7	10	3.9	11	9.5
	便利のよさ	31	4.6	32	12.6	10	8.6
	結婚して	189	27.8	69	27.2	24	20.7
	その他	155	22.8	43	16.9	24	20.7
	無回答	31	4.6	10	3.9	17	14.7
介護保険の介護度	不要で申請せず	485	71.2	186	73.2	7	6.0
	認定結果自立	37	5.4	4	1.6	2	1.7
	要支援1～2	60	8.8	29	11.4	3	2.6
	要介護1～3	42	6.2	13	5.1	1	0.9
	要介護4～5	15	2.2	4	1.6		
	無回答	42	6.2	18	7.1	103	88.8

表4は清見校区の住むようになったきっかけの「その他」の内容を示している。きっかけは「結婚」が多くを占め、枝光校区よりは少ない数値である。

表 4 住むようになったきっかけ（清見校区の「その他」の内容：166人）

結婚	48
親が住んでいた、生家、先祖代々、祖父母が老いた為、後を継ぐため	28
土地や家屋がある、入手できた・購入	14
市営住宅	8
移転・転居・引越、アパート・借家	9
親戚の勧めで、近くにいる。知人のお世話、勧め、近くに住むため	6
親の介護・世話の為。娘世帯と同居、姉妹と同居	5
生家に帰ってきた、結婚して離れ、また実家にもどる	5
商売をするため、仕事のため	5
被災のためやむなく	4
子どもの学校関係	3
実姉の転勤により。車が入らず坂が多かったので。自分の土地があるので。釣りが趣味で海の近いところ。免許の関係。バリアフリー建築なので。	各1

Ⅲ 買い物の距離により生じる問題

1 歩いて暮らせる街の範囲－500m～1 km以内

高齢者が歩いて買い物に行ける範囲はどの程度の距離であろうか。

図 2 は清見校区、図 3 は枝光校区の買い物の際の距離と移動手段の関連を示している。図の左側が斜面地、右側が普通の買物の距離、棒グラフは移動に利用する交通手段を示している。これによると距離が短いほど徒歩が多いのは斜面地も普通も同じであるが、斜面地の方が、徒歩は少ない。清見校区と枝光校区を比較すると枝光校区の方が斜面地も普通も徒歩が多いことから、校区による差が認められる。

距離が伸びると交通手段が多様になるが、移動手段は主に公共交通と自家用車である。枝光校区は地域のタクシー会社が専用のタクシー（やまさかジャンボタクシー）を運行しており、これを利用している人はタクシーより多い。斜面地と普通の比較では、清見校区は距離が伸びると自家用車より公共交通が多く、枝光校区では1 km以内でも自家用車が多いという違いが認められる。普通では、清見校区は公共交通より自家用車が多く、枝光校区では両者がほとんど同水準であり、斜面地ほど自家用車が多くない。「店の配達」は清見校区より枝光校区の方がやや多いようである。

このように、同じ斜面地でも条件が異なり、買物の移動手段も変わることを示している。

調査結果から、歩いて暮らせる街は高齢者にとり、5割以上が徒歩で買い物へ行ける範囲は500 m～1 km以内であり、この距離も斜面地などの環境条件により日常生活のバリアとしては大きく変わる。

図2 買物の距離と移動手段（清美校区）

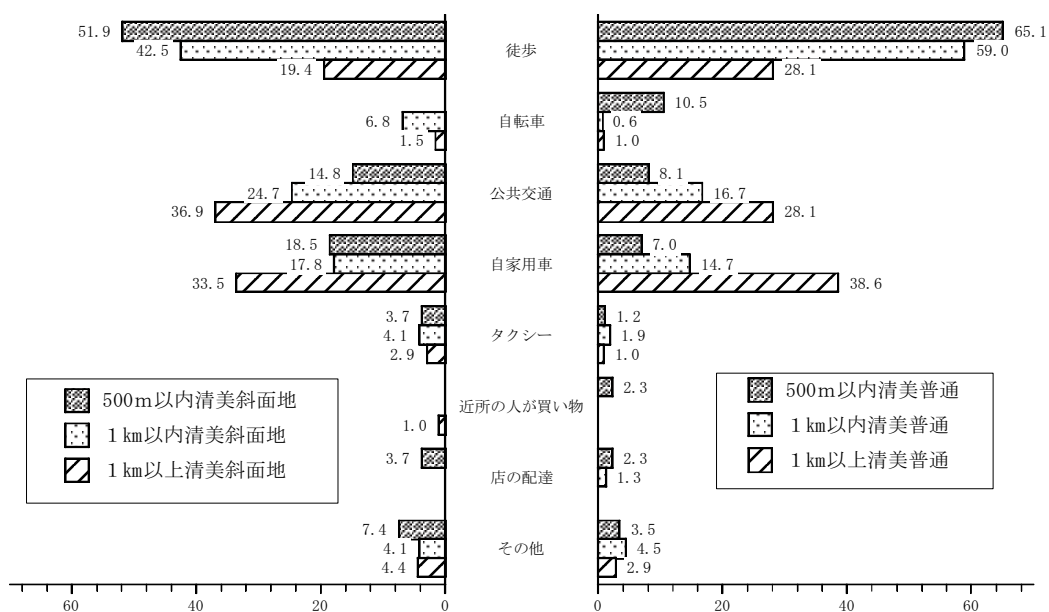
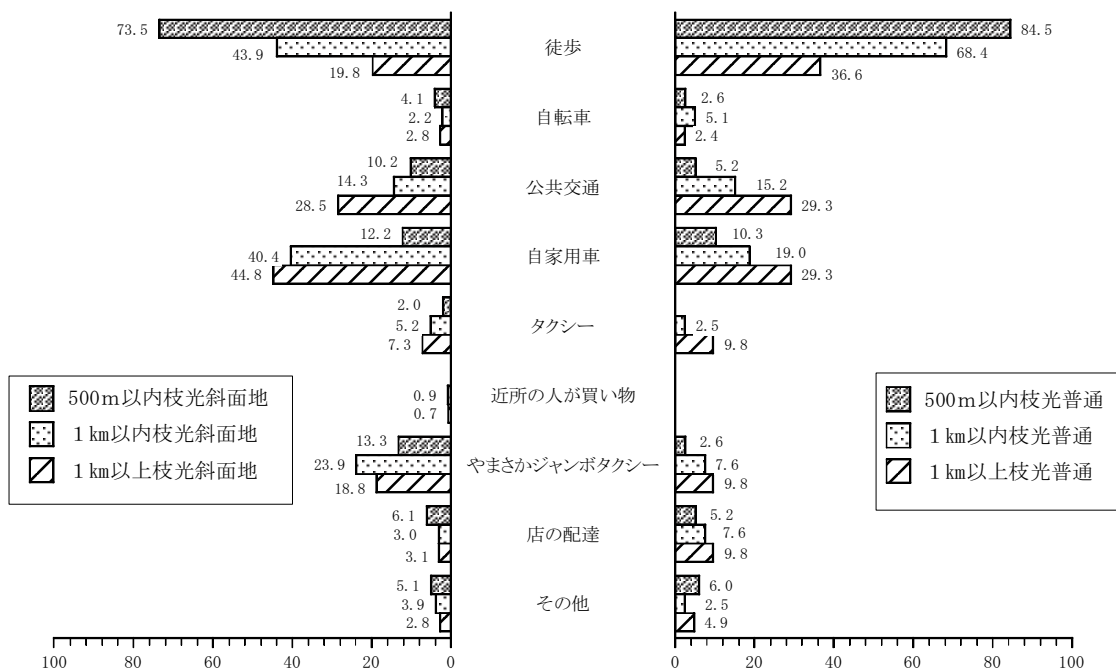


図3 買物の距離と移動手段（枝光校区）



2 距離と買い物の頻度－1 km以上で頻度に影響する

距離が遠いことや交通費を必要とする（費用がかかる）のであれば、回数が少なくなるであろう。また、距離は移動手段によっては持ち帰る荷物の量や、費用に影響することになる。持ち帰る量が少なければ、回数を増やすことにもなる。

図4 買物の距離と買物頻度（清美校区）

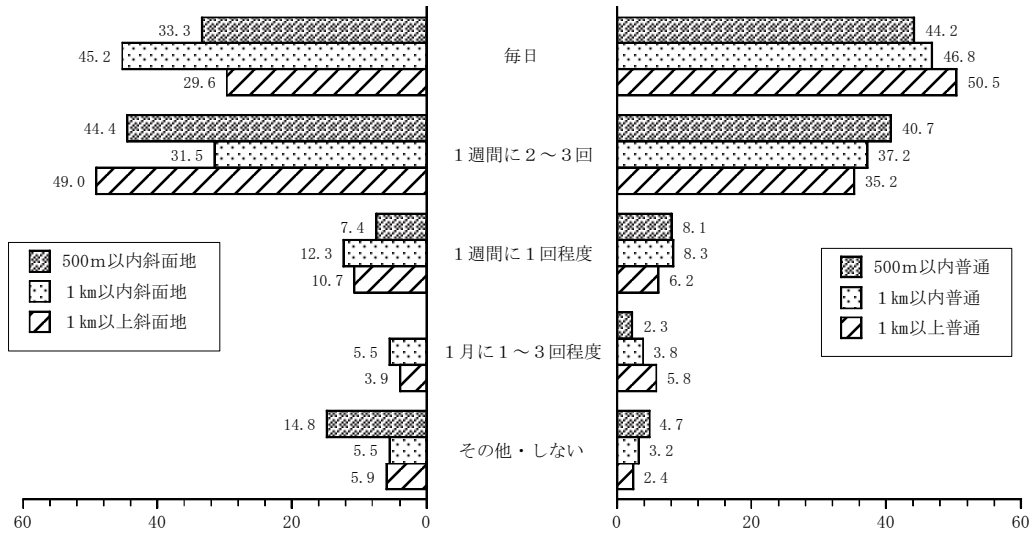


図5 買物の距離と買物頻度（枝光校区）

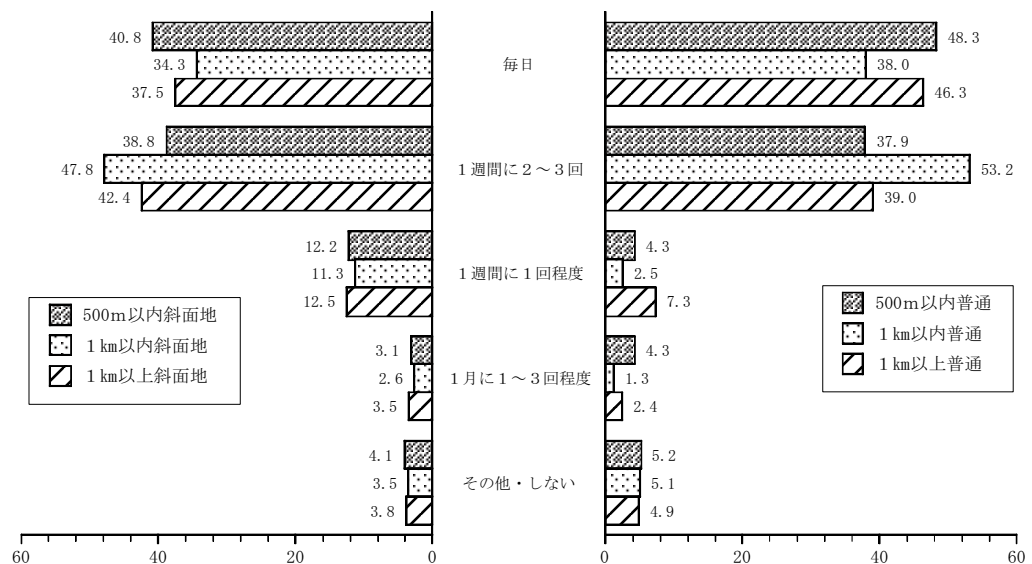


図4～5は清見校区と枝光校区の買物の距離と買物の頻度について示している。これによると、どちらも毎日と週に2～3回が最も多いのであるが、清見校区では普通は距離が遠くなくても毎日買物が多いのに比べて斜面地は500m以内でも週に2～3回が多い。

このように、500メートル以内では斜面地居住とその他居住では「毎日買い物をする」と「その他・買い物をしない」で差が認められる。距離が1 km以内では毎日買物が斜面地でも多いが、

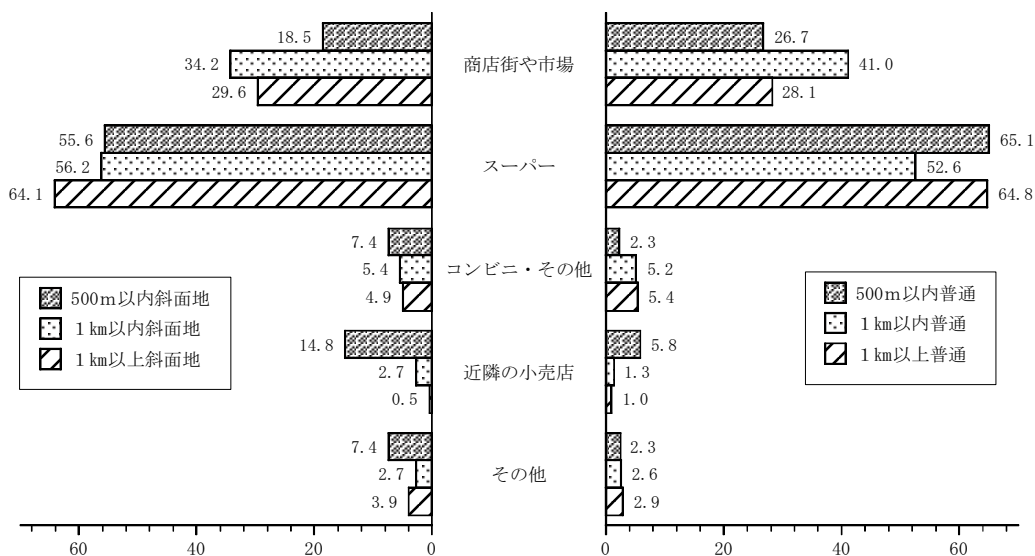
この場合は自家用車など移動手段を持つ可能性を示唆している。距離が1 kmを超えると買物の回数は「週に2～3回」に減少する。普通ではこのような大きな変化は認められないが、回数は「毎日買物」よりも「週に2～3回」の方が少ないなど、斜面地の不便さが示唆されている。枝光校区の斜面地では距離が伸びるに従い「週に2～3回」が増加する傾向があるが、「週に1回程度」という回答が距離関係なく多いなど、距離が買物に影響していることを示唆している。普通では、「毎日買物」と「週に2～3回」が同水準であるが、距離が1 km以内が「週に2～3回」と多いのは移動手段や家族構成が要因と考えられる。「週に1回程度」は普通よりも斜面地の方が多い。

このように、距離の違いと移動手段は買い物の頻度に少なからず影響している。また、同居家族の有無で買い物の移動手段が変わり、それにより頻度が異なることも推測できる。

3 距離と買い物の場所

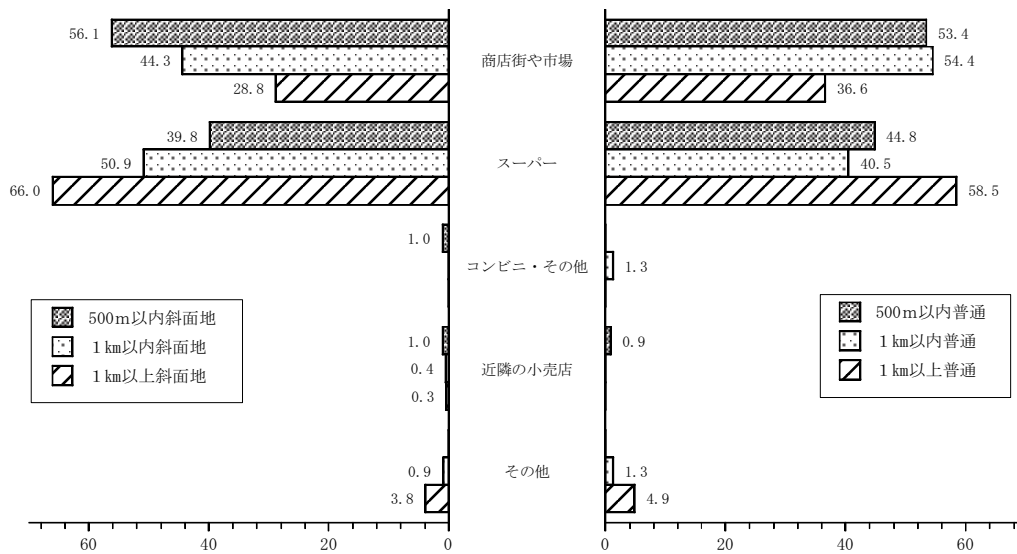
距離より買物場所が左右されると仮定したが、結果は逆であった。図6、7が示していることは、斜面地も普通も1 km以内では近くにある店を利用しているが1 kmを超えるとどちらもほとんど同じ種類の店を利用する傾向である。買い物のしやすさや好みが反映しているようで、近い方が買い物の場所となりやすい一方で、配達等のサービスが得られることや、なじみの店であることなどとともに、好みにより商店街やスーパーなどが選ばれるようである。

図6 買物の距離と場所（清美校区）



このように、斜面地も普通も1 km以内では近くにある店を利用しているが、1 kmを超えるとどちらもほとんど同じ種類の店を利用している。買い物のしやすさや好みが反映していると思われる。

図7 買物の距離と場所（枝光校区）



このように、同様の距離に商店街や市場、スーパーやコンビニ、小売店があった場合の消費者の買い物行動と選好度では、1 km以上の場合はスーパーを6割、商店街や市場を3割が利用する(品数の違い)。1 km以内になると、近い方を利用する可能性が高まる。

4 買い物で困ること

図8～9は買い物で困ることに関する問への回答結果を示しているが、普通ではどちらも距離が短いほど「困ることはない」と回答した人が多く、500m以内では7割近くが回答した。斜面地では500m以内でも「困ることがない」は3割程度であり、坂道、階段や段差に困る人が4～5割以上である。

買物の距離が1 km以内、1 km以上と伸びるに従い、坂道や段差に「距離が遠い」が増加する。枝光校区では、距離が遠くなるに従い、坂道や階段が多いと回答した人が増加していることは、買物の距離が遠くなるほど、坂道や階段の負担感が増大することを示唆している。同じ坂道や階段でも長い距離の中では負担感が増すことが分かる。

このように、普通に比べて斜面地では買い物が近くても坂道や階段が障害となっていることが分かり、1 km以内では、斜面地では距離と坂道や階段・段差を障害として意識する人が増加する。普通も距離や坂道や階段・段差を意識する人が増えるが、この距離では斜面地の「困ることはない」が約2割前後に減少するのに対して、普通は約5～6割程度への減少に止まっている。

1 km以上では、清美校区では距離が障害として最も意識されるが、枝光校区の普通ではそれほどでもない一方で、坂道や階段・段差が障壁として意識される。「困ることはない」と回答した人は斜面地が約1割、普通は約3～4割で、斜面地の9割近くの人が距離、坂道、階段・段差を障壁と意識している。

ここで示唆していることは、距離が遠くなるほど坂道や段差の障壁としての負担感がますますである。

図8 買物の距離と買物で困ること（清美校区）

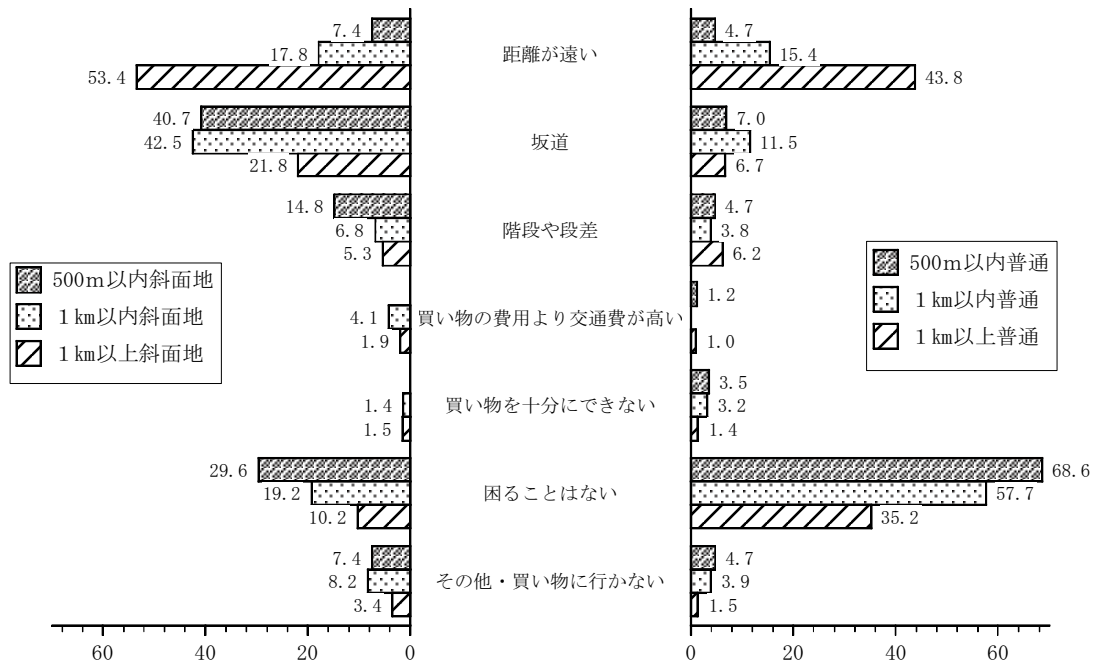
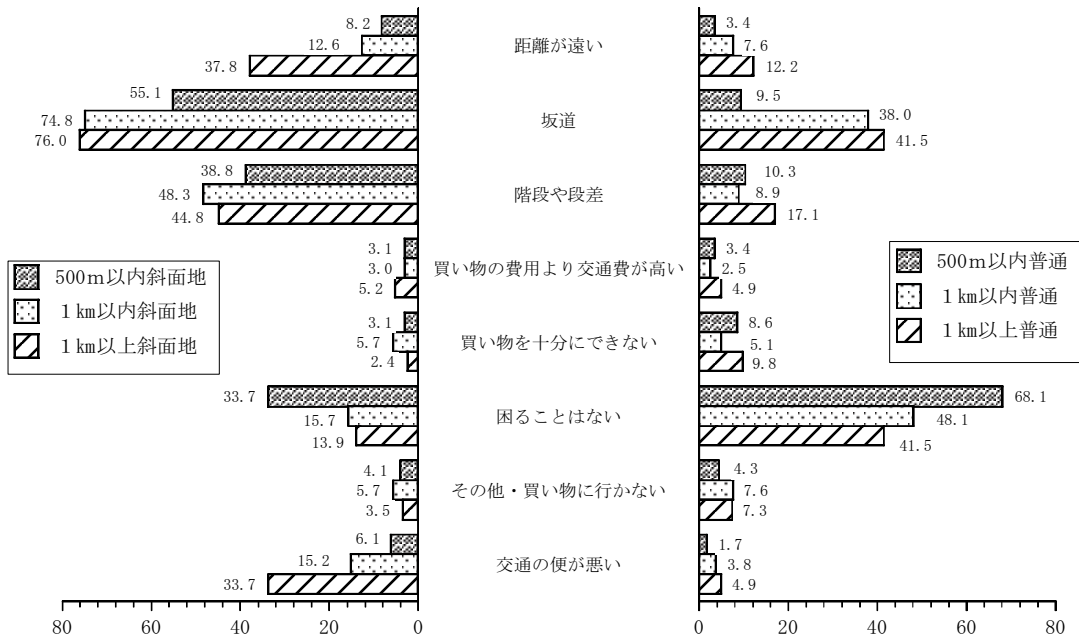


図9 買物の距離と買物で困ること（枝光校区）



IV 近所の人との関係

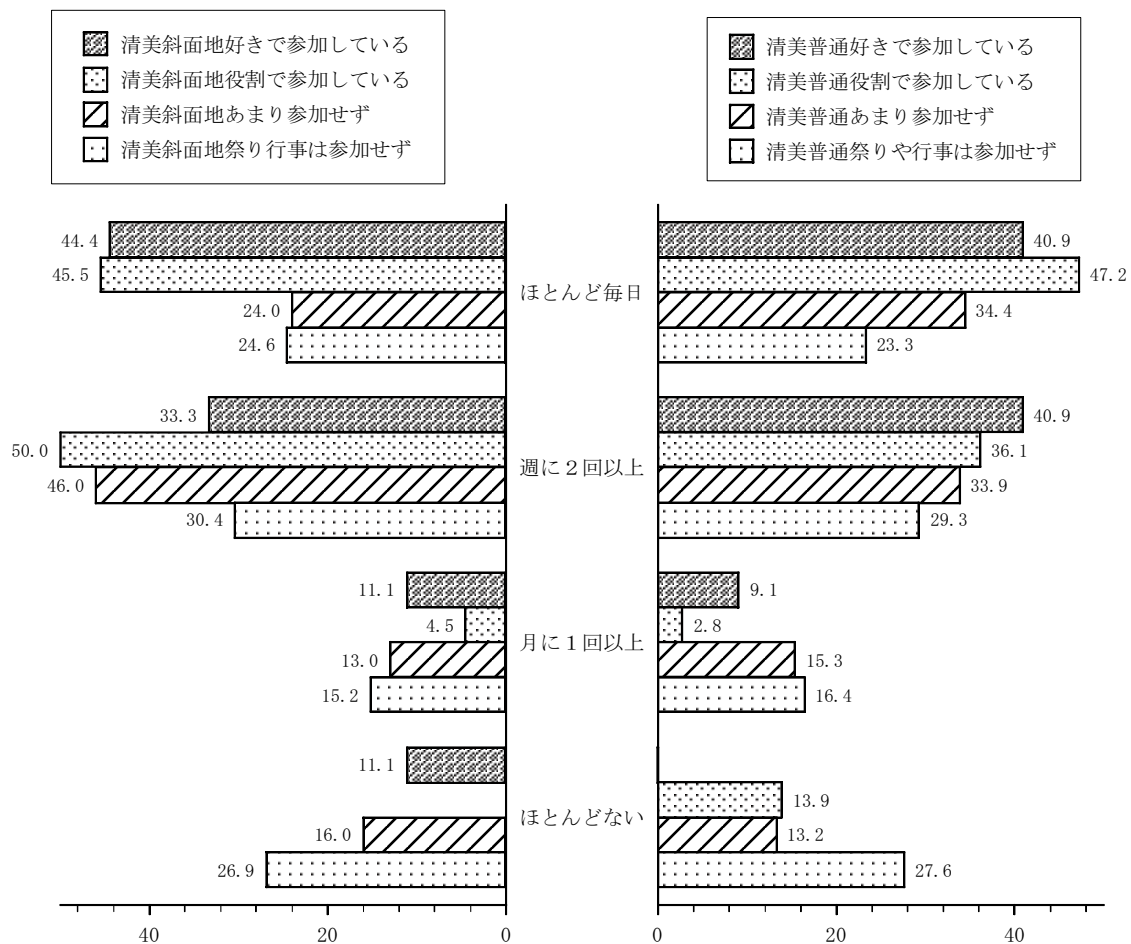
1 地域の祭や行事への参加と近所の人との会話の頻度の関係

近所の人との関係での仮説は、「斜面地などの生活に困ることが多いと思われる環境であれば、近所の人との関係は親密であろう」である。この視点から回答結果を見ると、必ずしも仮説を肯定する結果が得られたとは言えない。

図10、11には地域の祭や行事への参加と近所の人との会話の頻度についての回答を示した。これが仮説を検証する資料とはなり得ないが、祭や行事へ参加している（「好きで参加」「楽しんで参加」「役割で参加」）方が、近所の人との会話の頻度は高いことが分かる。

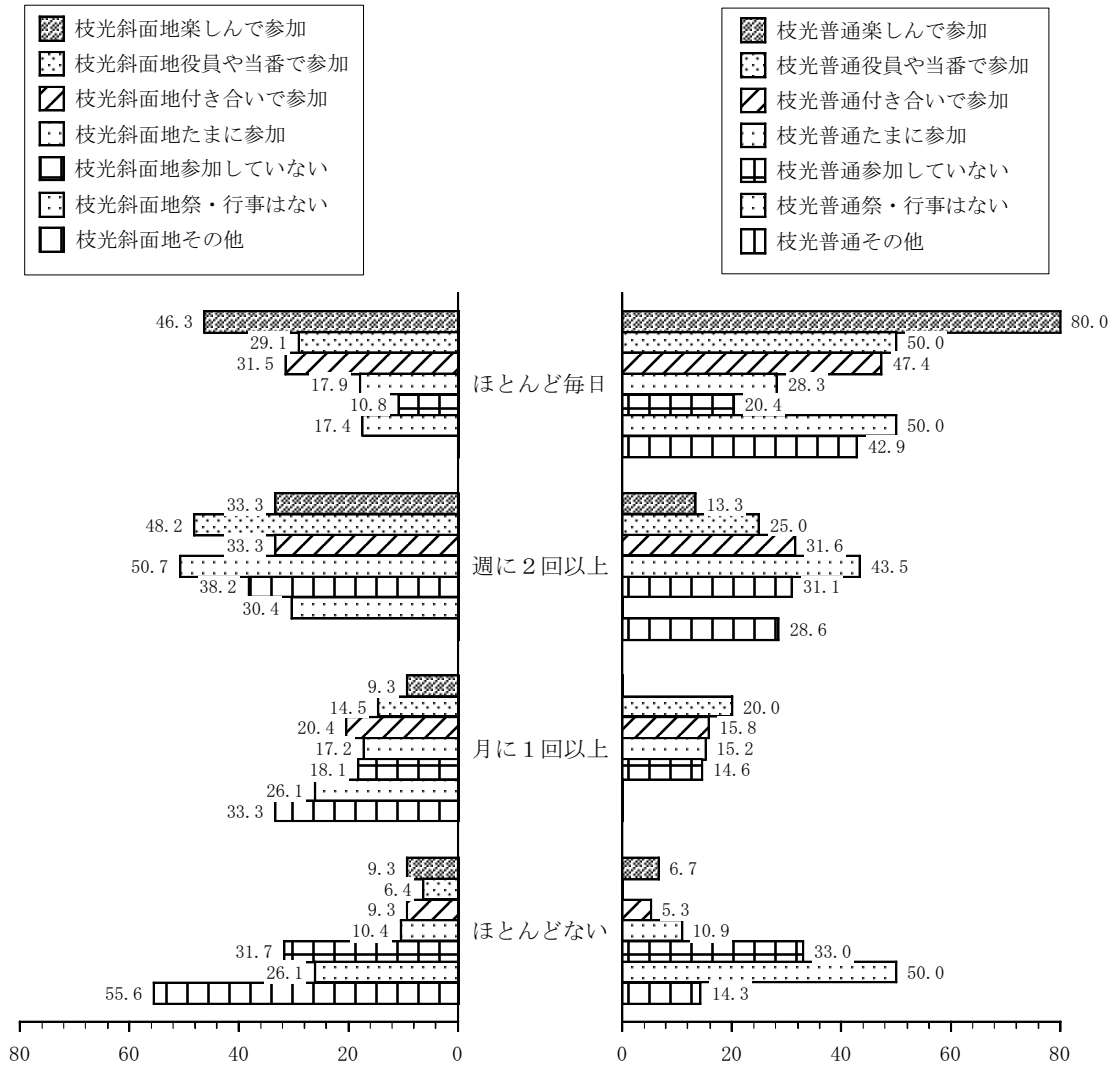
しかし、「週に2～3回（図では2回以上）」の頻度では「あまり参加していない」人も「参加している」人と大差がない。ただし、枝光校区では、同じく参加していても「楽しんで参加」している人と「役割やつき合いで参加」している人の間では会話の頻度に差が認められる。また、「参加していない」人では「会話がほとんどない」が顕著に多い。

図10 祭や行事への参加と近所の人との会話の頻度（清美校区）



このように清美校区と枝光校区では多少の地域差が認められる。斜面地や普通の地域との比較での差は僅かながら、斜面地の会話の頻度が高い傾向は認められるものの、大差がないようである。

図11 祭や行事への参加と近所の人との会話の頻度（枝光校区）



2 地域の祭や行事への参加と近所の人とのつき合い方

会話が多くても浅い関係はあり得るため、以下ではつき合いの内容を確認した。結果は図12、13に示す通り、「挨拶や立ち話程度」が最も多いつきあい方であるが、続いては「家事や些細な用事、相談や物のやりとり」が多い。特に枝光校区では、複数回答であるが、これが顕著に多い回答である。また、地域の祭や行事に「参加している・いない」による差が顕著なものも枝光校区である。清美校区では「挨拶や立ち話程度」では差が認められず、「家事や些細な用事、相談や物のやりとり」で地域の祭や行事に参加している人の方が多く行われているという回答を得たが、枝光校区では「挨拶や立ち話程度」は地域の祭や行事に参加していない方が多く、「家事や些細な用事、相談や物のやりとり」では地域の祭や行事に参加していない方が多いという結果が得られた。地域の祭や行事に参加している方が、近所の人とより親密なつき合いをしており、参

加していない人は浅い関係が多いということを示唆している。このように地域差は認められるが、斜面地と普通という居住環境による明確な差は認められない。仮説の検証は別の視点から行う必要がある。

図12 祭や行事への参加と近所の人とのつきあい方（清美校区）

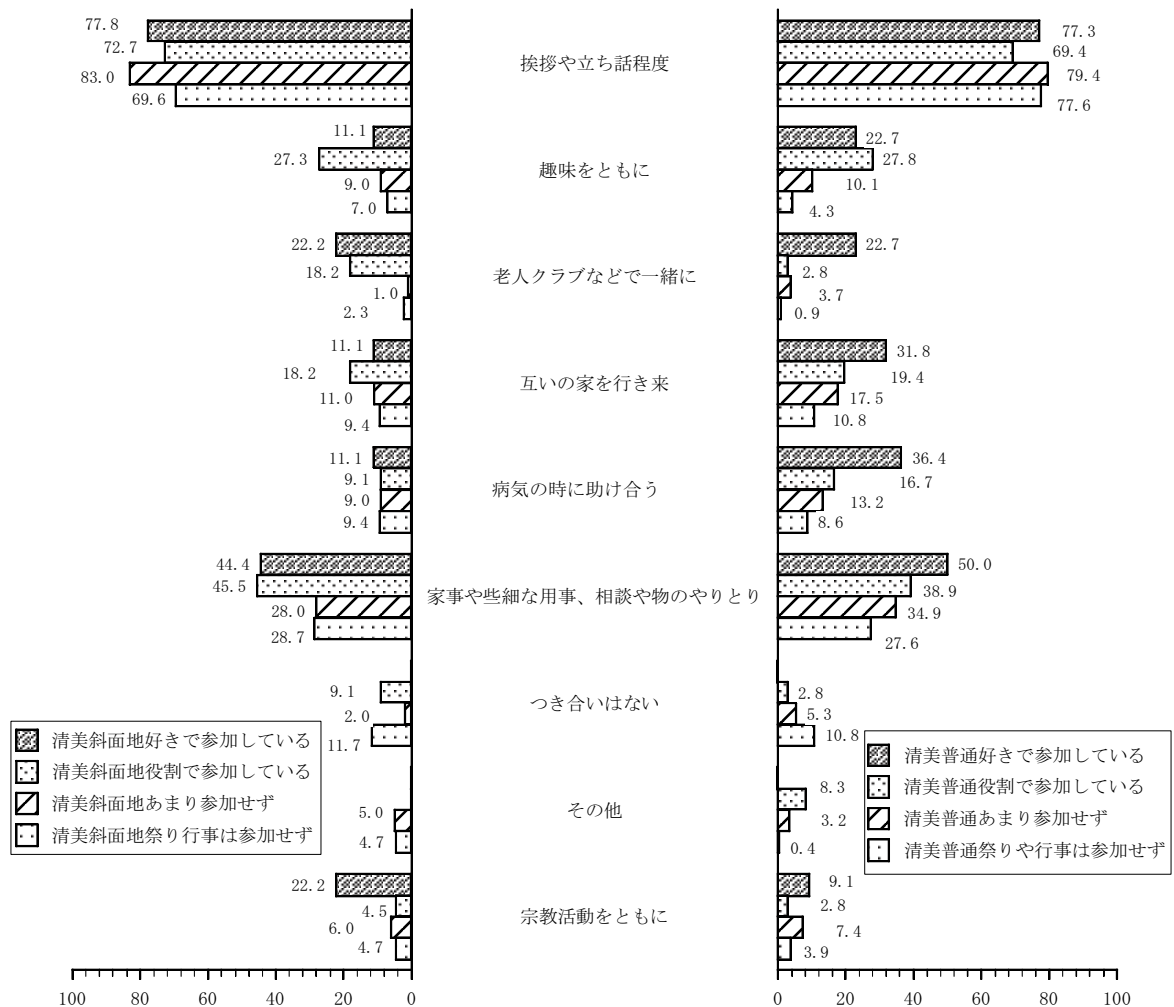
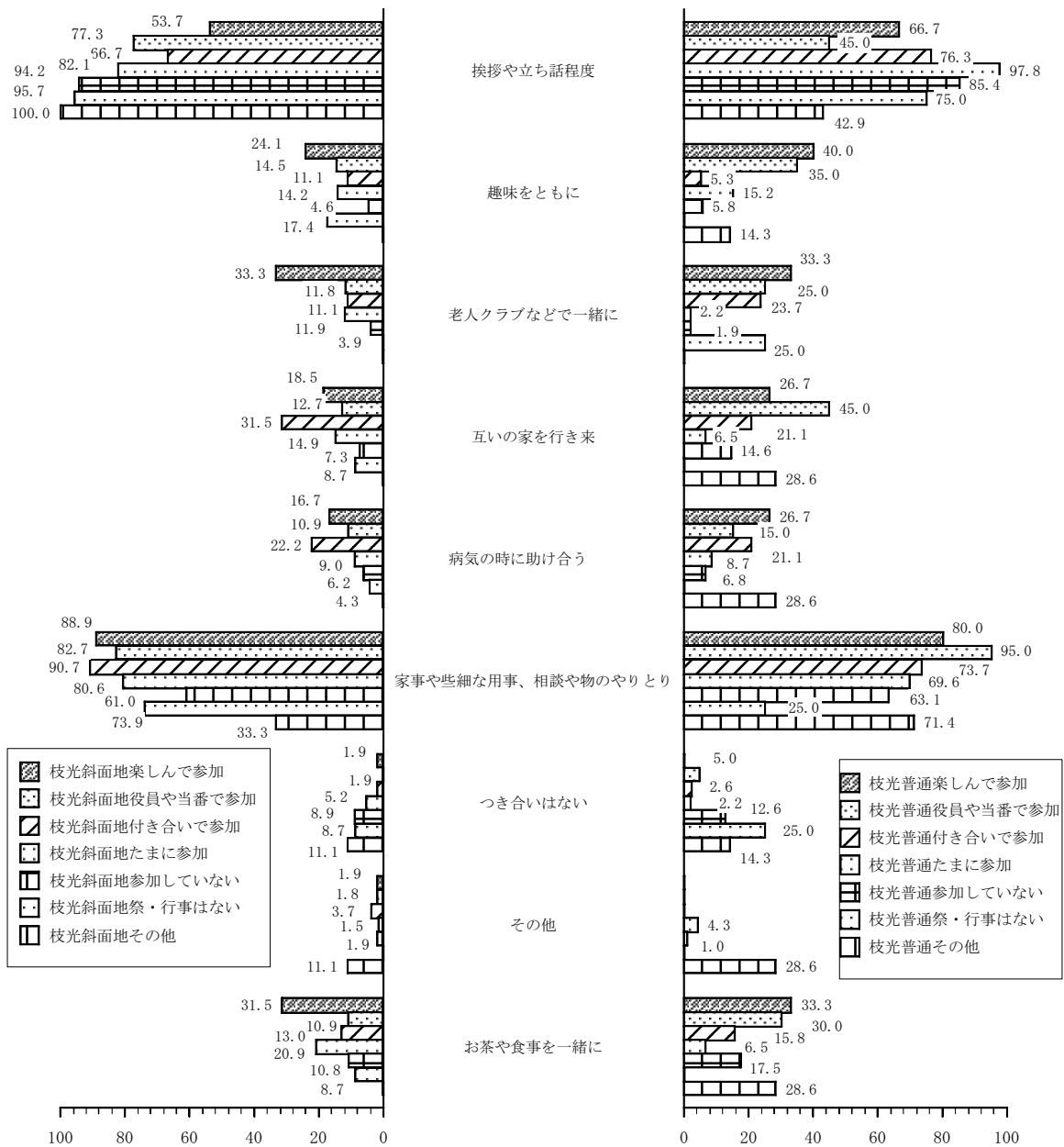


図13 祭や行事への参加と近所の人とのつきあい方（枝光校区）



3 近所の人との会話の頻度と付き合い方

図14、15には近所の人との会話の頻度とつきあい方の関連を示した（清美校区と枝光校区では選択肢が異なり、枝光校区の方が回答選択肢をより細かくして質問している）。図12、13ではこれをまとめて示しているが、ここでは質問のまま示している。これによると、全体として見ると、会話の頻度が高いほど親密な付き合いが多いといえる。この結果から、地域の祭や行事への参加は会話の頻度を高め、付き合いの親密度を高めるように見える。しかし、視点を変えると、社交性等のパーソナリティも考慮しなければならない。

会話と近所の人とのつきあい方の関係については、枝光校区が顕著に特徴を示しているように見えるために、これに着目して少し詳細に見ると、会話の頻度が高いほど、挨拶や立ち話し程度が減少し、物のやりとり（図中では「物の提供」）が顕著に増加する傾向がある。この傾向は清

美校区にも認められる。しかし、物のやりとりは儀礼的な面も多く含むために、これが増加しても親密なつき合いとはいえない。「互いの家を行き来する」や「お茶や食事を一緒にする」「相談事をする」等が重なって親密なつき合いといえるかもしれない。このように見ると、会話の頻度が高い方が、これらのつきあい方でも顕著に多いことが図は示しており、この点でも、地域の祭や行事への参加は会話の頻度を高め、つき合いの親密度を高めるように見える。ただし、会話の頻度が高いから祭や行事に参加するという逆も成り立つために、どちらが主たる要因とは明言できない。

図14 会話の頻度と近所の人とのつきあい方（清美校区）

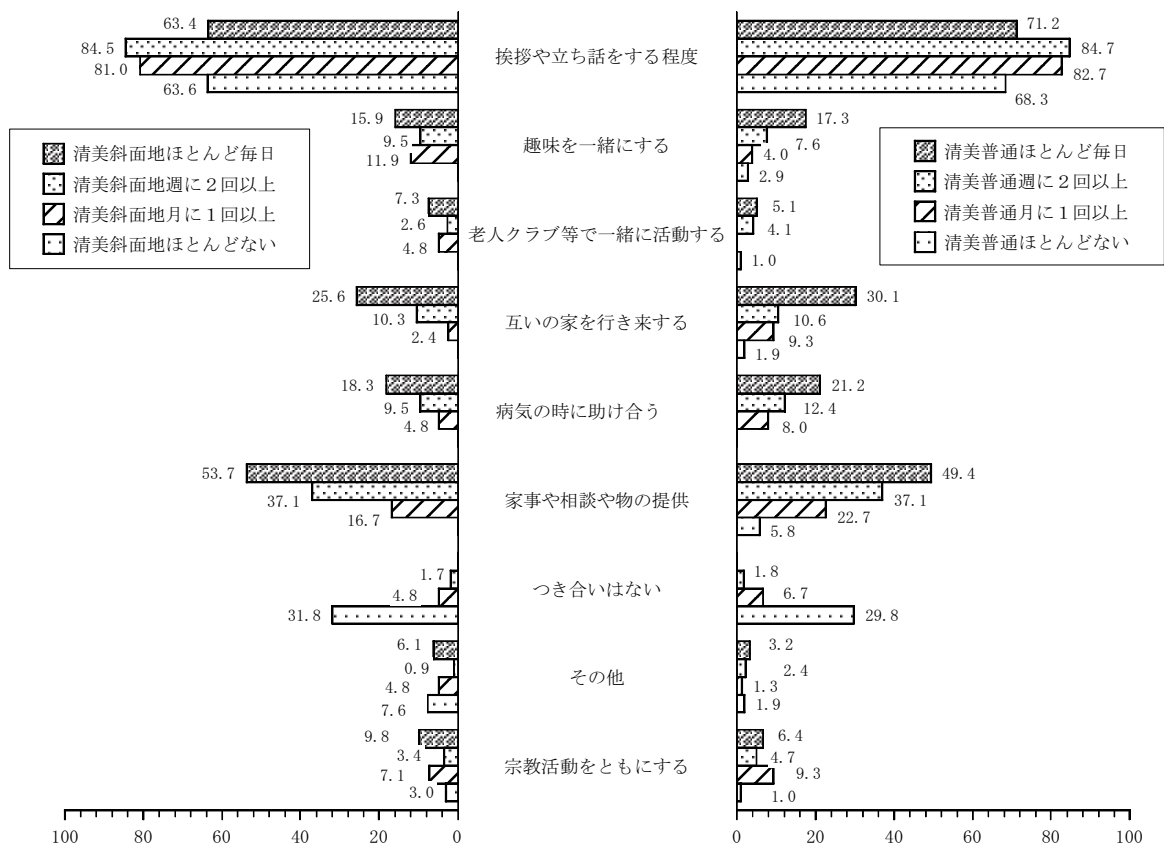
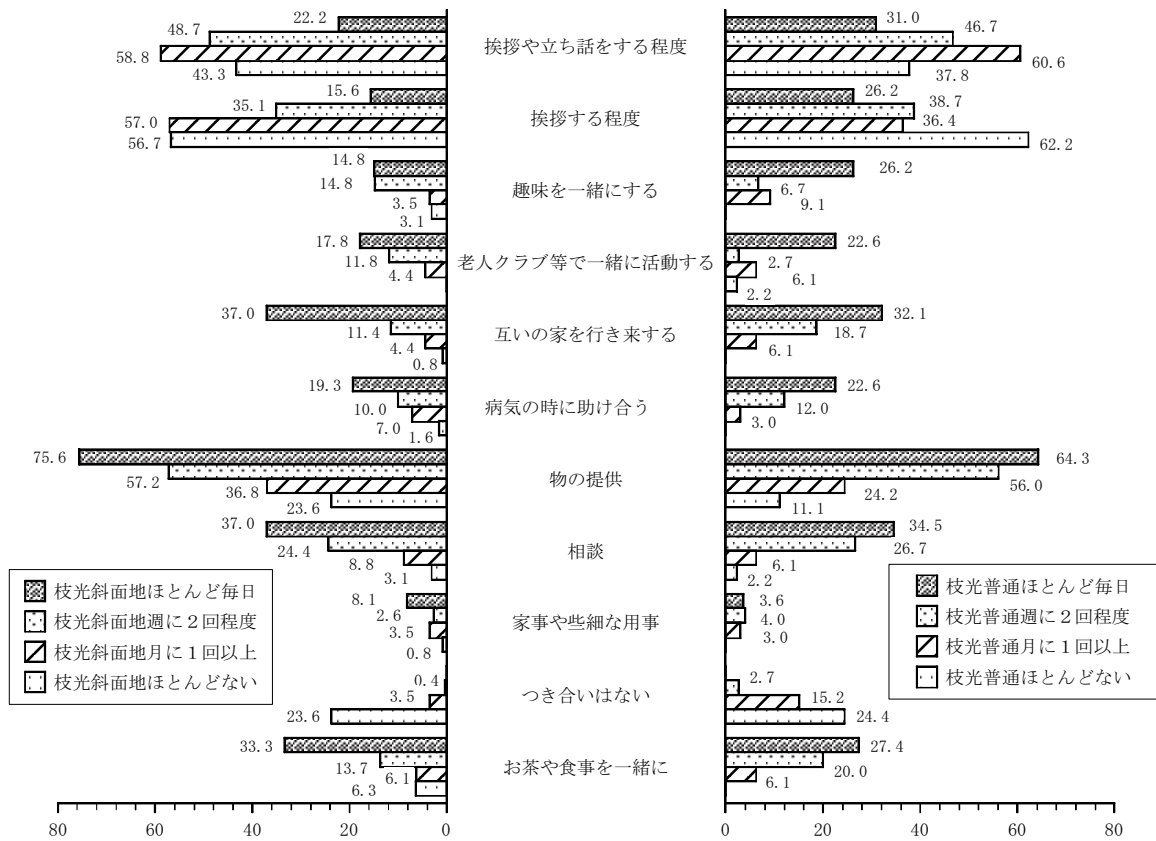


図15 会話の頻度と近所の人とのつきあい方（枝光校区）



他者との付き合いは近所の人との付き合いばかりではないので、会話や行き来、物のやりとり以外の、電話や手紙、メールなどによる非面接的付き合いの有無を尋ねたが、その結果が表5である。

表5 近所の人との会話の頻度と電話やメール、手紙のやりとりの関連（清美校区）

	直接会って話をしたり、行動をとる方が多い	会うよりも電話やメール、手紙でのやりとりのほうが多い	電話やメール、手紙は必要な時だけする	ほとんどしない
ほとんど毎日	50.0	9.7	23.9	11.3
週に2回以上	38.8	13.6	30.1	12.2
月に1回以上	26.5	10.3	41.0	17.9
ほとんどない	5.9	7.6	33.5	51.2
無回答	13.6	6.8	18.6	6.8

表5によると、会話の頻度が多いほど、直接会う関係が多いのであるが、会話の頻度が月1回程度やほとんどない人も、必要なときは電話やメール、手紙を利用していることが分かる。ただし、必要なときだけであり、積極的に多用している様子はない。

4 生活環境の違いによる近所の人とのつき合いについて

斜面地は生活環境として坂道・段差の他に距離が普通の地域に比べてより大きな障壁となることが分かった。そのため、普通の地域と比べて近所の人との間にはより親密な相互の支援をしていると仮定したのであるが、つき合いが親密いと推測できる内容に大きな差は認められなかった。

考えられる理由は

- ① 助け合わねばならないほどに大きな問題はない。
- ② 家族がいるために近所の人の手助けを必要としない。

などである。

高齢者の多くが口にするのは、「家族がしてくれる」である。他者の世話にはなりたくないという意識の表れであるが、このような意識を超えるほどの問題が多くは起こらないのであろう。「家族同様のつき合い」といわれる「家事や些細な用事、相談」を斜面地・普通の両方の居住地域に会話の頻度が多い人では3～5割の人が行っている。

このような関係は居住環境に関連なく行われることを示している。つまり、居住地域の環境により、近所の人とのつき合いが大きく変わる訳ではないことを示している。

5 社会関係の項目数と居住地域の関連

相互の助け合いとして15項目をあげて、「手助けをした」「手助けをしてもらった」を回答してもらった。その結果を「した」「してもらった」に1点、この両方の場合に2点を配点し、その平均値を算出して、手助けの項目数とした。平均値が高いほど手助け（「手助けをした」「手助けをしてもらった」）の項目数が多いことになる。

ただし、この平均値は「手助けをした」「手助けをしてもらった」回数の平均ではない。その意味では平均値が高いことは手助けを「した」「してもらった」項目が多いことを示すにすぎず、回数でもなくどの程度の手助けをしたかの質でもない。平均してどの位の種類の手助けをしたり・してもらっているかを示すにすぎない。

このような意味を持つ表6の平均値を見ると、斜面地の方が、普通よりも高い数値を示している。社会関係の質的な側面や回数をこれにより説明はできないが、手助けの種類は斜面地居住の方が多いことを示している。

表6 手助けの種類の数（清美校区）

居住地域	平均値
斜面地居住	2.85
普通居住	2.47
全体	2.61

V 人的資源としての家族

居住環境としては人的資源も加えることができる。つまり、高齢者の場合は同居している子どもの有無、近隣の助け合いの有無等である。以下では世帯構成別に買物や外出頻度について比較した。

1 居住環境、性別と世帯構成の違い

世帯構成を示した表7から、清美校区は居住地域による家族構成には大きな違いがない。枝光校区では斜面地の「ひとり暮らし」が少なく、「夫婦のみ」「同居世帯」が多い。また、清美校区の斜面地と普通地域や枝光校区の斜面地の「同居世帯」が3割未満や約3割であるから、図2、3の1km以上の買い物には、高齢者自身の自家用車運転を含むと分かる。

表7 性別と世帯構成

			合計	一人暮らし	夫婦のみ	その他の世帯	
清見校区	性別	男性	306	38	189	79	
			100.0	12.4	61.8	25.8	
	女性	560	214	189	156		
		100.0	38.2	33.8	27.9		
居住地域	斜面地	324	89	144	91		
		100.0	27.5	44.4	28.1		
	普通	546	163	235	144		
		100.0	29.9	43.0	26.4		
			合計	一人暮らし	夫婦のみ	同居世帯・その他	無回答
枝光校区	性別	男性	434	61	236	133	4
			100.0	14.1	54.4	30.6	0.9
		女性	606	268	122	205	11
			100.0	44.2	20.1	33.8	1.8
	居住地域	無回答	11	—	2	—	9
			100.0	—	18.2	—	81.8
		斜面地	681	194	248	227	12
			100.0	28.5	36.4	33.3	1.8
普通	254	92	80	75	7		
	100.0	36.2	31.5	29.5	2.8		
無回答	116	43	32	36	5		
	100.0	37.1	27.6	31.0	4.3		

表7は性別による世帯構成も示しているが、女性の方が一人暮らしと子どもとの同居が多い。男性は夫婦のみの世帯が多い。このため、買い物には女性のほうが多く問題を抱えているであろうことを推測できる。

2 世帯構成と外出頻度の違い

図16、17は世帯構成別の外出頻度を示している。「毎日外出」では、斜面地、普通のどちらも「ひとり暮らし」の外出頻度が少ないのが分かるが、斜面地の方がさらに少ないことは坂道・階段が障壁となっていると推測できる。

図16 世帯構成と外出頻度（清美校区）

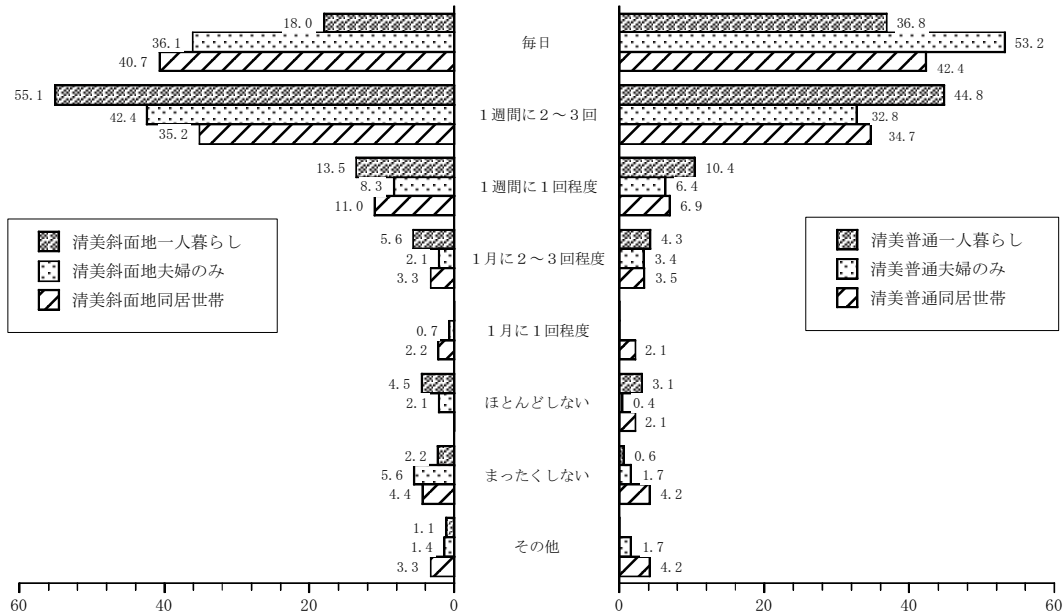
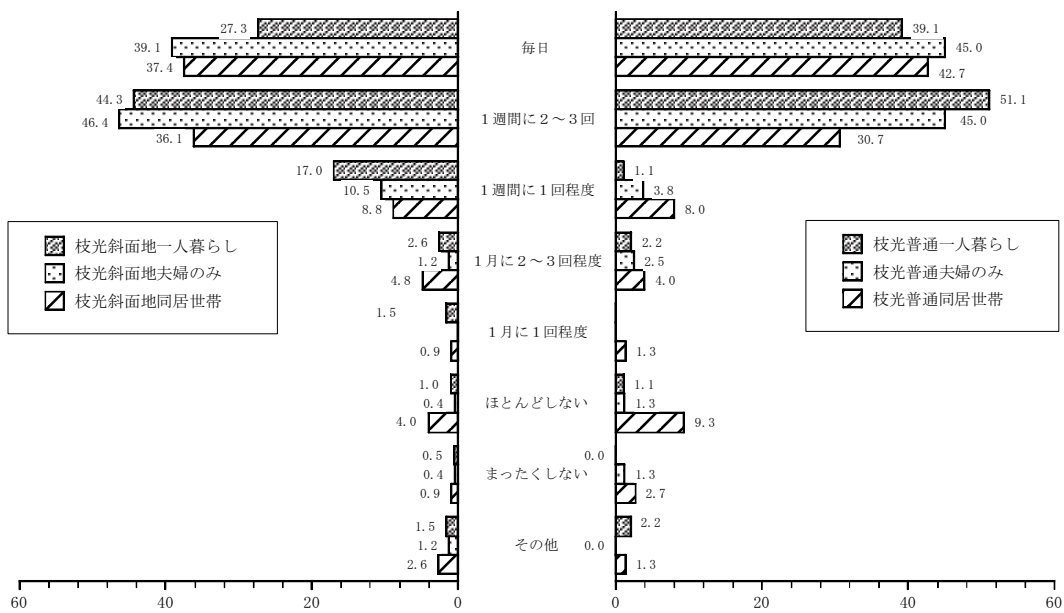


図17 世帯構成と外出頻度（枝光校区）



3 世帯構成と買物の距離による外出頻度の違い

図18、19は世帯構成別の買物の距離（500m以内）と頻度の関係を示している。「毎日買物」では、斜面地、普通のどちらも「ひとり暮らし」の買物頻度が少ないのが分かるが、斜面地の方がさらに少ない。ただし、枝光校区では清美校区ほどに大きな差はない。

図18 世帯構成と買物距離と頻度（500m以内清美校区）

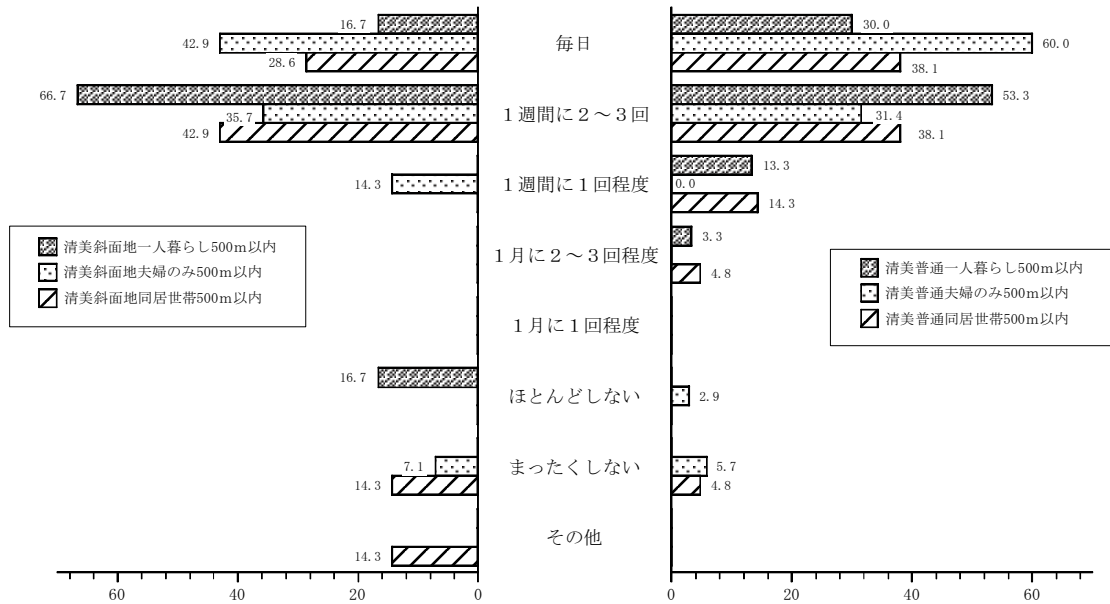


図19 世帯構成と買物距離と頻度（500m以内枝光校区）

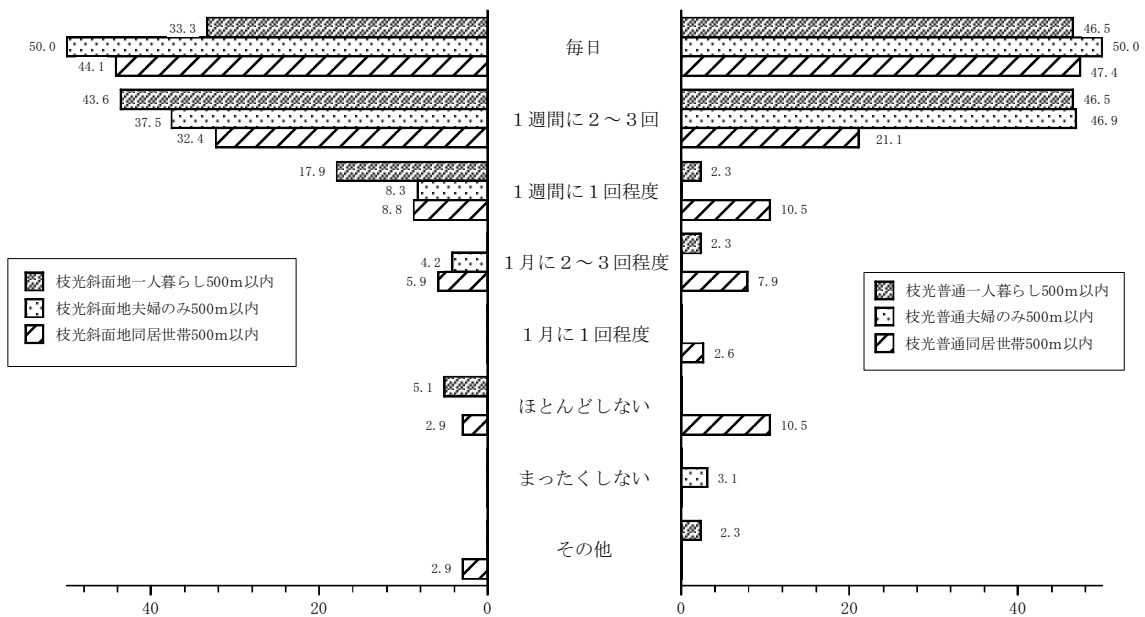


図20、21は世帯構成別の買物の距離（1 km以内）と頻度の関係を示している。「毎日買物」は距離の影響で、どの世帯構成でも減少するが、枝光校区の減少が顕著である。斜面地、普通のどちらも「ひとり暮らし」の買物頻度が少ないのが分かるが、買物の距離が500m以内ほどの差は認められない。

図20 世帯構成と買物距離と頻度（1 km以内清美校区）

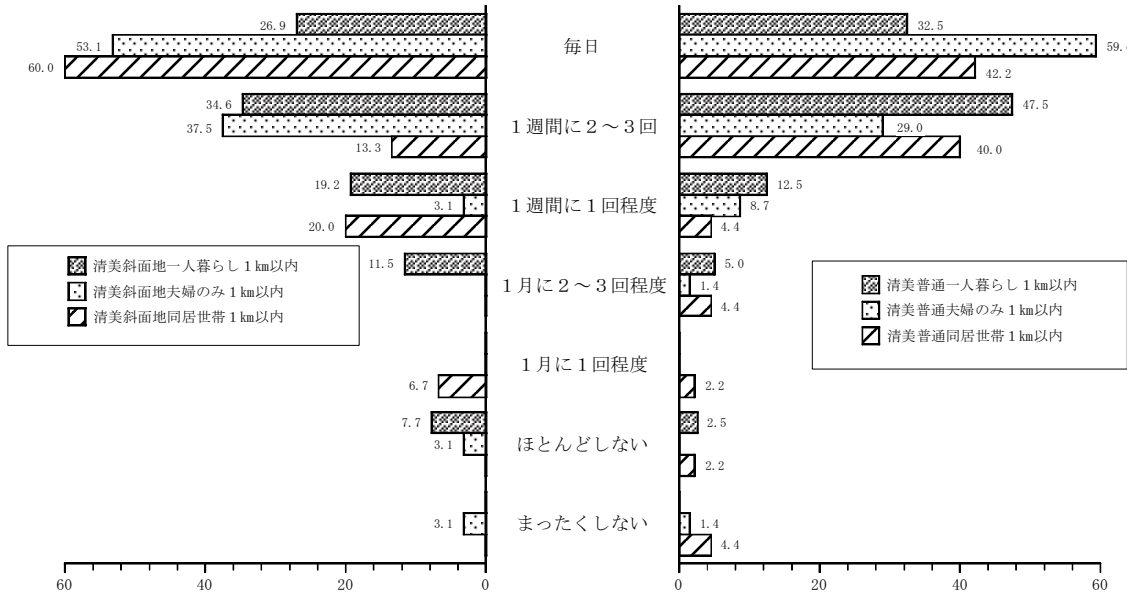


図21 世帯構成と買物距離と頻度（1 km以内枝光校区）

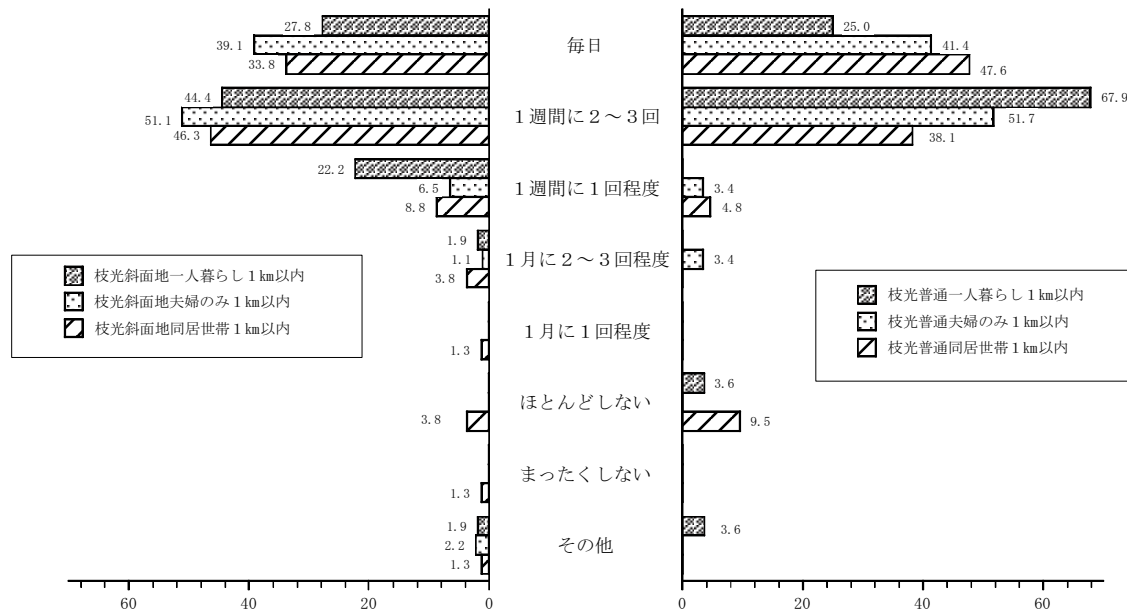


図22、23は世帯構成別の買物の距離（1 km以上）と頻度の関係を示している。「毎日買物」は距離の影響で、どの世帯構成でも減少し、特に斜面地の減少が著しい。さらに、斜面地、普通のどちらも「ひとり暮らし」の買物頻度が少ないのが分かるが、清美校区の「ひとり暮らし」の買物頻度が顕著に少ないことが分かる。

図22 世帯構成と買物距離と頻度（1 km以上清美校区）

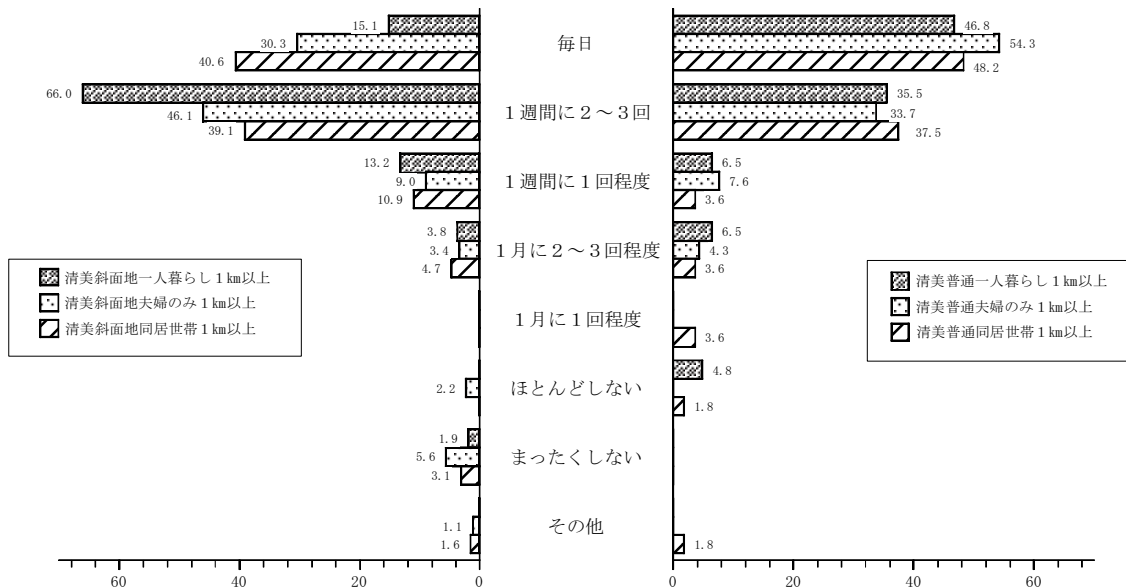
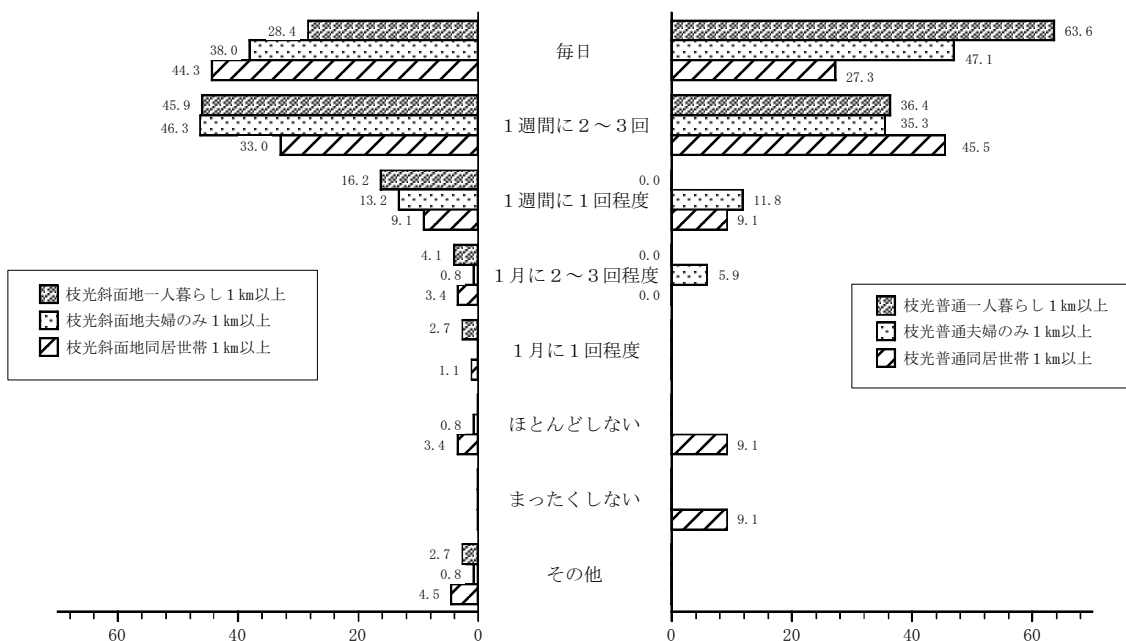


図23 世帯構成と買物距離と頻度（1 km以上枝光校区）



4 世帯構成と近所の人とのつき合い方

世帯構成別に見た場合の近所の人とのつき合い方は、図24、25のとおり、大きな差は認められないが、「同居世帯」の方が近所の人とのつき合いは少ない傾向がある。

図24 世帯構成と近所の人とのつきあい方（清美校区）

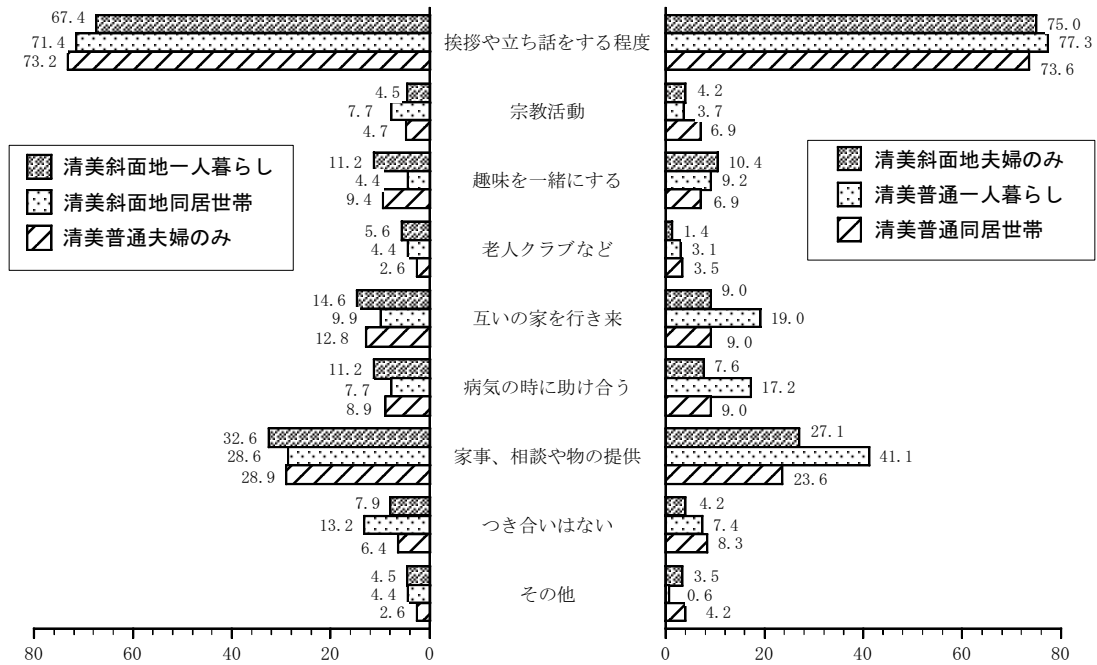
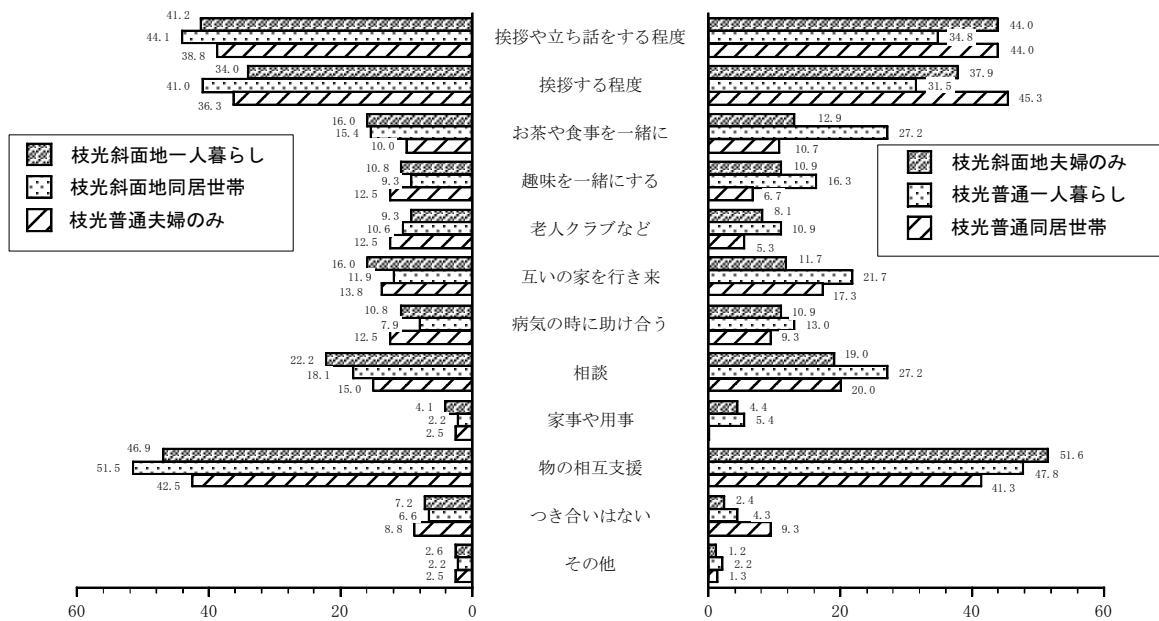


図25 世帯構成と近所の人とのつきあい方（枝光校区）



5 近所の人との相互支援を必要と感ずること

図26は枝光校区の近所との相互支援を必要と感ずることへの回答を示している。図のとおり、夫婦のみが多様なことに回答が多く、一人暮らしの回答が少ない。このことは一人暮らしが日常生活で近所との相互支援の必要性を感ずることが少ないことを示している。同居世帯の場合は家族がいることで、近所の人との相互の支援の必要性を感ずないと推測できる。

図26 世帯構成と近所の人との相互支援を必要と感ずること（枝光校区）

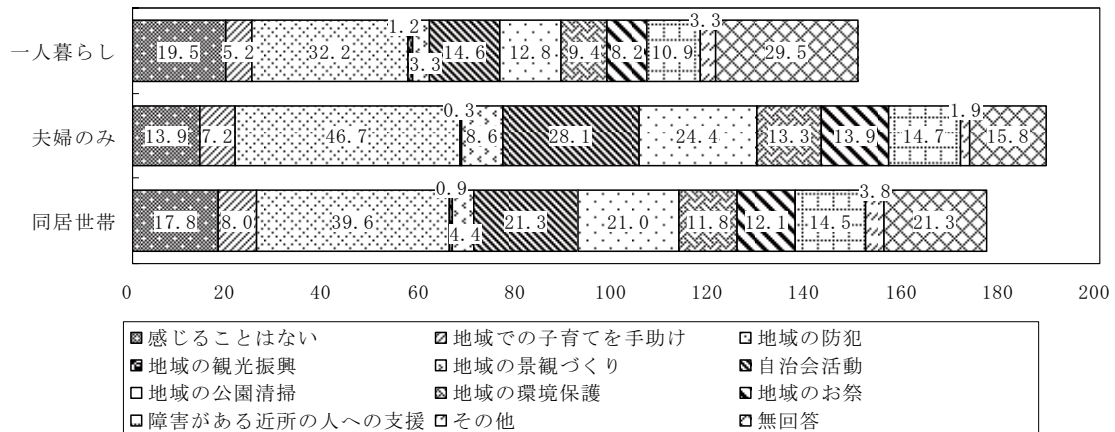
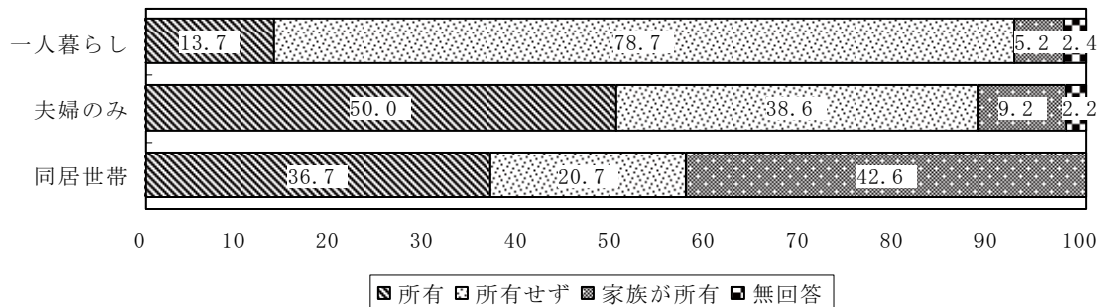


図27 世帯構成と自家用車の所有（枝光校区）



買物などの外出に影響する自家用車の所有は、図27のとおり、一人暮らしが約8割所有せず、同居世帯では家族所有を含め約8割が所有している。夫婦のみでは半数が所有している。このことが買物の頻度や距離に影響していると思われる。

枝光校区の通称「やまさかジャンボタクシー」は14人乗りと9人乗りで運行されている。タクシーといっても、運賃1回150円で、日の出ルートは午前8時40分に枝光本町商店街を始発として日の出町一丁目、枝光市民センター前等を経由して枝光本町商店街前へ戻る19の停留所を設けた地域巡回タクシーである。時間帯により1時間に1～3本、1日19便運行されている。最終便は18時10分枝光本町商店街発である。日の出ルートの他に枝光ルート（7便）、荒手ルート（21便）、山王ルート（12便）、山王・藤見ルート（3便）がある。山王・藤見ルートや枝光ルートは運行時間帯が昼前後に限定されている。

VI 仮説の検討及び、結果の考察

1 仮説の検討

前述した仮説は、坂道や段差が多い地域の高齢者は、①徒歩で行ける買物の距離が短い、②移動手段では自家用車よりも公共交通機関が多い、③買物の頻度が少ない、④買物が十分にできない、⑤近隣の人と相互の支援が活発、である。

①の仮説、徒歩で行ける買物の距離が短いに関しては、③の仮説、買物の頻度が少ないとともに仮説を肯定する結果であった。一人暮らしの場合はさらに距離も短くなり、回数も少なくなる傾向がある。ただし、買物は利用する店との距離に左右される面もある。

②の仮説、移動手段では自家用車よりも公共交通機関が多いに関しては、自家用車の有無により左右され、公共交通機関と自家用車が同程度か自家用車の方が多いという結果である。このことに関しては図27に示したとおり、自家用車の所有率が低い一人暮らしの場合は、徒歩で行ける範囲に買物が限定されるか、公共交通機関を利用するであろうと推測できる。

④と⑤の仮説、買物が十分にできない、近隣の人と相互の支援が活発に関しては両者とも仮説は否定された。近隣の人と相互の支援という社会関係に関連して言及すれば、高齢者は友人との趣味活動やボランティア活動志向が強いというのは、ネットワークが友人や地域外にあり、居住地域内への関与には関心が向かず近隣の人と相互関係には負に働くことになる。そのために活発に活動し自立的生活を志向すればするほど、居住地域内の相互の助け合いには逆機能となる可能性がある。地域行事に参加しない人が7～8割を占めるのは、地域外での活動が活発なことを示唆しているのかも知れない。

2 結果の考察

調査結果から分かることは、距離が障壁として意識される比率から見て、歩いて買物に行ける範囲は1 km以内であるが、これも年齢や環境条件、世帯構成により変化する。

坂道は斜面地に生活している人のみならず、普通の地域に生活している人にとっても障壁として意識されている。しかし、このために近所の人との付き合いが特に活発というわけではなく、影響は見られない。このことは、近所の人と相互に支援し合うほどの問題が日常生活では多くないことを示唆しており、さらには家族がいれば家族で解決できる程度の問題であると思われる。一人暮らしの場合も近所の人との相互支援を必要とは思っていないことから、同様のことがいえる。

近所の人との関係については、パーソナリティの側面も考慮する必要があるために断定はできないが、自治会・町内会の役員などで、行事にやむなく参加していても、近所の人との付き合いは親密になる傾向が認められた。共同作業をすることが、近所の人との付き合いの深まりに寄与することが窺える。

ここまで、斜面地に生活する等の環境条件による高齢者の生活の困難さの違いを見てきたのであるが、高齢者は生活の困難が多くても斜面地から降りてはこない場合が普通である。高齢者のライフスタイルからも、住み慣れた土地を簡単には離れない。このため、居住地域の近くに社会資源を増やすことが重要なようである（転居の条件で最も多かった回答は「スーパーが近い」である）。

幸福な高齢期や成熟したパーソナリティの必要条件は健康・経済・社会関係とされる。斜面地に居住する高齢者のこの必要条件が有効となるためには、「スーパーが近い」という回答が得られたとおり、他の条件もストレスレスへと近づける必要がある。

しかし、必要条件であるから、これらを充足しても必ずしも幸福に至るとは限らない。高年者、高齢者は自立志向（自分の力で生きていたい、人や物の世話になりたくない）や生涯現役志向（経験を活かしたい）が強く、同情されたくないという意識や自分の時間を楽しみたいという意識も強い。このような幸福のための十分条件ともいえる条件を充足することや買い物に伴う毎日のストレスの逡減と自分時間の確保のために、社会の質（QOS）を高める必要がある。社会の質を高めるためのこまめな対応の実現が個人や地域での生活の質（QOL）に帰結する。特に配慮が必要なのは、斜面地で生活する一人暮らし高齢者である。女性が多い一人暮らし高齢者は自家用車の所有率が低く、買物を含めた移動が困難な人が多い。こまめな対応から地域での生活の質の確保のための基本的条件を検討し社会の質を高める必要がある。